九氣密意

下卷

特261
468

始

特261
468

田中胎東編

九氣密意

下卷

京都　氣學講堂發行

六白金氣

○西の正當より十五度北、北の正當より十五度西の天地の間六十度を指して乾(イヌイ)の方と謂ふ。

○先天乾の方の天地の氣を八白土氣と爲し後天乾の方の天地の氣を六白金氣と爲す。

○六白金氣は

日に執つて戌の刻、亥の刻卽ち午後七時より午後十一時迄とし

年に執つて戌の月、亥の月十月十一月とし寒露、霜降、立冬、小雪の節とし

四季に執つて夏の墓と春の生とを兼ぬ。

○抑々六白金氣とは太陽を謂ひ古來人類の天と讃へ神と稱ふる所以の本體たり。

○御神體、御本尊として明鏡玉劔、黃金佛を安置崇仰し之を莊重に祭祀するは卽ち六白金氣の用を畏敬するに在る而已。

○宇宙六白金氣の軌を概述すれば左の如し。

動、施與後援、剛毅、軍隊、
健、投資、超過、種子果實、
幼兒、統率、圓、鑛石、
大始、上長、規則、投機、
懷姙、主人、機械、心臟左肺尖、
大也、滿足、交通機關、
過分、守護監督、官廳、

◎六白を動と爲す。

○常に動き動きて止まざるを六白と謂ふ。

○太陽は常に動きて久遠に止まず森羅萬象以て其生を保つ。

○地球の自轉運行、人の活動生存、機械の輪轉動作皆之を六白と爲す。

○學生の運動競技も亦六白と爲す。

○六白を乾道男道と爲し二黑を坤道女道と爲す。

○凡そ女子の體育奬勵は坤道の地役を以て之を爲し決して乾道の激烈なる運動競技を以て之を爲す可からず。

蓋し天地に乾道と坤道とは劃然たる區別あるものにして若し坤女、乾道に熱中する時は反つて其身體左肺、心臟を害するのみならず其性剛慢浪費と爲り色情の災を蒙りて遂には坤德の破壞を見るに至るべし。

○人、六白の祐氣を用ふるや進んで奮鬪活動を爲し心身多忙と爲るに至るべし。

◎六白を健と爲す。

健とは氣血環りて滯なきを指す。

○身體氣血の循環良好にして停滯する處なきを健康と爲し氣血の循環不良にして體内停滯箇所あるを病氣と爲す。

○身體氣血停滯の箇所に據り病名を附し胃に在れば胃病、惱に在れば惱病、肺に在れば肺病と謂ふ。

○注射、手術、摩擦の醫療法は唯其病處の氣血停滯を疏通せしむるに存す。

○人、六白金氣の尅氣を用ふるや其體内氣血の循環敏速に過ぎ神經過敏と爲り血壓亢進と爲るに至るべし。

◎六白を幼兒と爲す。

四歳以下の幼少子女を皆六白と爲す。

○幼兒の心氣を神の如しと謂ひ亦幼兒の常に動きて休まず其母の困惑するが如きは皆六白金氣の用と爲す。

○人、乾方の尅氣を用ひて擧家移動するや災眚(サイセイ)先づ其幼兒より來るべし。

◎六白を大始と爲す。

大始とは新興膨脹するを指す。

○樹は其天運乾位に入りて其年輪を大始し木は其天運乾位に入りて其果實を大始し穀は其天運乾位に入りて其種子を大始す。

○人の本命乾位に入るや何人も其住家の擴張、新築、其業務の新創投資の心氣發動すべし。

○人、六白の祐氣を用ふるや新業の創始、舊業の擴張を發心して遂に大成を見るに至るべしと雖も此際資金不足して中途挫折の恐あれば前以て之が對策を講ずるを要す。

◎六白を懷姙と爲す。

○成年の女子六白金氣の祐氣、乾方の祐氣を用ふるや姙孕するに至るべし。

但此際姙孕せざる女子は其生家北方に欠陷あるものとす。

◎六白を大と爲す。

○國家的事業、統一的大業、大建築、大人物、皆之を六白とす。

蓋し天の大なるに據る。

○人、六白の祐氣を用ふるや大業を創始して千辛萬苦し遂に之を大成して大人物と爲るに至るべし。

◎六白を過分と爲す。

過分とは標準より三倍の超過を謂ふ。

○人の本命乾位に入るや必ず過分の新希望新目的を起すものとす。

○本命乾位の新希望新目的は必ず資金の不足を以て三年にして之を改變するの事情發生すべし。

されば之に染手するには中途資金の不足及五年間は必ず辛苦するを豫め知るを要す。

◎六白を施與後援と爲す。
○受くるを期待せずして與ふるを施と謂ふ。
○天は地に對し常に施し
君は臣に對し常に施し
男は女に對し常に施すべし。
○施は之を後援、引立、援助とも謂ふ。
○人、後援、引立、援助を稟けんと欲せば須く六白金氣の祐氣、乾方の祐氣を用ふべし。

◎六白を投資と爲す。
○金錢財寶の放出を以て事業の資と爲すを六白とす。
○人、六白金氣の祐氣、乾方の祐氣を用ふるや人より資金の貸與援助を受けて事業を營むに至るべし。

◎六白を統率とす。
統率とは上の下を指揮下命するを指す。
○將の兵を用ひ、官の民を治むるを六白と謂ふ。
○人、六白の尅氣を用ふるや其統率正鵠を失す可く乾方欠陷の家に永居せば其指揮下命を誤るに至るべし。

◎六白を上長と爲す。
○顯要の上官、富貴の長者を六白と爲す。
○大臣大將頭取社長艦長船長支配人より頭領首領に至る迄上長者を皆六白と謂ふ。
○人、六白の祐氣を用ふるや剛毅進取となりて常人に優越し遂に顯要の上官、富貴の長者と爲るに至るべし。

◎六白を主人と爲す。

○乾方は之を主人、祖先の位と謂ふ。

○乾方欠陷の住家は其家の主人常に外出勝か然らずんば病弱なるべし。

○乾方欠陷の舊家は累代主人早世夭死して女子と兒童のみ之に棲居すべし。

◎六白を滿足と爲す。

○陽氣滿つるを六白と謂ひ陽氣足りて缺くる無きを六白と謂ふ。

○人の慾求の一切足りて人生滿足の域に達せるを六白と爲す。

○森羅萬象六白金氣の滿に達すれば一白水氣の用を生じ遂に亦二黑土氣の無に歸る可し。

之を金生水の哲理と爲す。

則ち

巨萬の富も蟻の一穴より崩れ

健全の身も輕き病より死す。

○滿、達すれば遂に缺くるに至る可く、昇、達すれば遂に降るに至るべし。

○されば人は滿に達及し能ふるも之に位せざるを以て賢と爲す。

○滿は損を招き

位は危を招く

孔子之を

危き者は其位に安んずる者也　と謂ふ。

○人の本命乾位に入るや天運の滿に達し遂に缺に向ふに至るべし。
則ち
○人の本命乾位在泊を以て陰運衰運の緒と爲す。

◎守護監督を六白と爲す。
○安全の消極的手段を守護と謂ひ之が積極的手段を監督と謂ふ。
○宇宙、守る作用は乾(イヌイ)の戌の作用にして戌の作用は南方午の先見より生ず。
○軍隊の常備は國の守護を其本來の使命と爲し主人の任務は家の守護を其本來の使命と爲す。
○人、六白の祐氣を用ふるや守護監督の疎漏を以て失敗を見る

可く乾方欠陥の家の子女は親の指揮に抗すべし。

◎六白を剛毅と爲す。
剛とは心氣の强大を謂ひ毅とは心氣の亂怯せざるを謂ふ。
則ち
度胸の良きを剛毅と爲し自ら信ずる事厚く輕擧妄動せざるを指す。
○抑々乾道卽ち男道は剛毅を以て一貫す。
男子剛毅ならずんば亦何をか成さんや。
○剛毅ならざる者は常に人に阿諛追從して自重せず優柔不斷遂に生涯無爲碌々に終るべし。
○人、六白の尅氣を用ひ或は乾方欠陥の家に永居する時は剛毅の氣を失ひ度胸無きに至るべし。

◎六白を超過と爲す。

○成績の優等、技術の優秀、豫算の超過を六白と謂ふ。

○森羅萬象其用の超凡長過を優と謂ひ其體の超凡長過を秀と謂ふ。

○宇宙一切の優秀を六白と爲す。

○子女六白の祐氣を用ふるや學業の成績、技術の成果自ら著しく優秀と爲るに至る可く

又、六白の尅氣を用ひて家の修造、移轉を爲す時は建築費の增嵩、生計費の膨脹共に其豫算を超過するに至るべし。

◎六白を圓と爲す。

○宇宙一切の體及用の丸きを六白と謂ふ。

廻轉、包圍、循環、圓動を六白の用と爲し

太陽、頭腦、モーター、機關銃、車輪、貨幣、指輪を六白の體と爲す。

○玉珠も亦之を六白と謂ふ。

寶玉、彈丸、電球、玉子、鉛球、護謨球を六白と爲す。

◎六白を規則とす。

○一切の準據す可き掟を六白と爲す。

憲法、法律、軍律、戒律、家憲、學則、方則、定理、定則、定款、條令、條約、約定を六白と謂ふ。

◎六白を機械と爲す。

電氣機械、鑛山機械、兵器一切、造船機械、紡績機械より寫眞機械、時計機械に至る迄一切の機械類は其形體の大小、其構造の粗

密を論せず皆之を六白と謂ふ。

◎交機通關を六白と爲す。

自動車、電車、汽車、自轉車を六白と謂ふ。

◎官廳を六白と爲す。

村役場、駐在所、登記役場より內務省、警察署、大審院に至る迄一切の役所を皆六白と謂ふ。

◎軍隊を六白と爲す。

○國軍の狀況、他國の軍隊の配備は其參謀本部を太極とせる盤の乾方を以て之を知るべし。

○軍用氣學は之を口傳に讓る。

◎種子果實を六白と爲す。

米、麥、豆、粟、稗の類より林檎、栗、柿、梨、桃、蜜柑の類に至る迄皆六白と謂ふ。

◎六白を鑛石と爲す。

○山より採取して未だ精錬せられざる粗金を六白とす。

石炭、金、銀、銅、鐵等の原鑛は皆之を六白と謂ふ。

○人、六白の祐氣、乾方の祐氣を用ふるや人に薦められ或は事情に絡られて止むなく鑛山の事業に染手刻苦し遂に偉大なる鑛脈を堀當てゝ一擧巨萬の富を獲得するに至るべし。

◎六白を投機と爲す。

幾に乘じ異常の巨利を博するを投機と謂ふ。

○投機の得失は天地の司配にして人意の企劃に非ず。

○戰爭、相場、競技皆之を投機と爲す。

○投機の可否は先見の明と進退の用とに存すと雖も進退の用を以て主と爲し先見の明を以て從と爲す。

蓋し先見の明あるも進退の用を誤る時は之が實果を得る能はざるべし。

○大戰鬪、大相場、大競技に於ける投機の天運は常時の訓練、規則、研究に準據して來らず。

必ず常規豫期を失して發動するものにして當事者唯、天祐を祈念して臨機應變之に處する而已

所謂之を人事を盡して天命を俟つと謂ふ。

○されど其結果は亦意想外なる大勝、大利を獲得するものにして眞の大勝大利は必ず豫期豫想を全く裏切るを其本來と爲す。

○されば大戰鬪、大相場、大競技には體の多大、用の剛强を決して恐れず唯天地加護の有無卽ち祐氣効應の如何を畏憂する而已。

○乾方欠陷の家に永居せば主人投機を以て其財を蕩盡するに至るべし。

◎六白を心臟左肺尖と爲す。

心臟の體を九紫とし其用を六白とす。

左肺の體を八白とし其用を六白とす。

○人、六白金氣の尅氣を用ふるや血壓亢進して心臟の病を發し又空咳(カラセキ)を以て左肺の上部を痛むに至るべし。

○北方の六白金氣は之を暗劔殺氣と爲す。
之を用ふれば何人も强盜の劔難、金苦の災、上長の背反を受くるに至るべし。
○艮方の六白金氣を祐氣として用ふれば智能優れて有力なる庇護者を得るに至る可く之を尅氣として用ふれば勤務先の罷免及肋膜の病に罹るに至るべし。
○東方の六白金氣を祐氣として用ふれば繁忙發展の運を興し之を尅氣として用ふれば新業の創始進展を以て巨損を招くに至るべし。
○巽方の六白金氣を祐氣として用ふれば未婚者は長者と良緣齊ふ可く既婚者は世の有力者と交際始まりて其信用を向上す可く之を尅氣として用ふれば人の爲世の爲金錢を投資徒費して遂に困窮するに至るべし。
○南方の六白金氣を祐氣として用ふれば心眼開けて發明發見の榮譽を見る可く之を尅氣として用ふれば眼病心臟病に惱むに至るべし。
○坤方の六白金氣を祐氣として用ふれば鑛區を買收して巨利を得可く之を尅氣として用ふれば其營業の地役を棄てゝ一攫千金を夢み以て大損失を受くるに至るべし。
○西方の六白金氣を祐氣として用ふれば資金の貸與を受くるに至る可く之を尅氣として用ふれば酒食遊蕩に其財を盡くすに至るべし。
○乾方の六白金氣を祐氣として用ふれば投機を以て一擧巨萬の富を得可く之を尅氣として用ふれば新業の投資及相場に染手して父祖の遺產を傾くるに至るべし。

○六白金氣を祐氣として用ひ得る人は
七赤金性、二黑土性、五黃土性、八白土性、一白水性、
にして之を尅氣として用ふ可からざる人は三碧木性、四綠
木性、九紫火性及六白金性其人とす。

○本命六白金性の人の天運は之を詳密に區別すれば三萬七百
二十の差異あれども今其常道の運を摘錄すれば左の如し。

○本命六白金性の人は其兩親の運最旺なる時代に生誕するが
故に中年時代迄は辛苦するものとす。
風格高尙にして頭腦亦明晰なりと雖も考慮警戒に偏し行爲
愼重に過ぎ爲めに反つて機を失し進退の用を誤る恐あり。
其性獨行不羈、世路の盤根錯節に堪へ以て之を成就せしむる

剛氣ありと雖も又一面吝嗇冷酷にして人との交際宜しから
ず。
本命六白金性の人は其言動を愼み敬上憐下の意を以て人に
對し世の孤立無援に陷るなきを特に留意せらるべし。
其運晩老たるが故に假令牛歩の遲くとも堅實なる地歩を一
歩一歩固めて以て其大成を成就すべし。

○尙宇宙六白金氣の體象一例を擧ぐれば左の如し。
時計、指輪、眼鏡、虎、獅子、熊、狼、犬、猫、神佛、先祖、發電所、大通、廣場、皇帝、
大統領、總理、總長、大建築、中心地、首都、本店本社、根據地、堡壘、鑛山、
高山、石、砂利、電球、

七赤金氣

○庚(カノヘ)、酉(カノト)辛の三方位を西方と謂ふ。

○先天西方の天地の氣を一白水氣と爲し
後天西方の天地の氣を七赤金氣と爲す。

○七赤金氣は
日に執つて夕とし酉の刻午後六時前後二時間とし
年に執つて酉の月九月とし白露秋分の節とし
四季に執つて秋とし陰氣發生の盛と爲す。

○抑々太陽は日々申の刻より下降し始むと雖も其地球上より
消隱するに至るは酉の刻と爲す。

○凡て森羅萬象陰氣の發生を酉庚(カノヘ)辛(カノト)七赤と稱す。

○宇宙七赤金氣の司配する軌を概述すれば左の如し。

一爻(コウ)不足、右肺、澤、容喙、
少女、腎臓、金屬、禮、
說(コロコブ)、貨幣、銀行質屋、嶮岨、
辯能、引退、背反、
食、贅澤、財寶、
兌、清潔、堅實、

◎七赤を一爻(コウ)不足と爲す。
一爻不足とは陽氣三分の一足らざるを謂ふ。

○人の本命西方に在泊するや何人も陽氣卽ち元氣一爻不足して身體衰瘦するに至るべし。
本命七赤金氣に同會する場合亦然り。

○人、七赤金氣を稟くるや其祐尅を問はず必ず其心氣不足を感

ず可く其行爲不行屆を見るに至るべし。
則ち
其心氣不平、不滿を起す可く其行爲落度を生ずるに至るべし。
○七赤金氣を用ひて購求せるものは內容或は外形に不足瑕瑾ある可く之を用ひて工事、事業を起す時は一部の不足を殘して工を竣へ或は業を閉ずるに至るべし。

◎七赤を少女と爲す。
年少未婚の天眞爛漫なる女子を七赤と謂ふ。
○人、月の七赤金氣を用ひて婚嫁する時は先づ女兒を懷姙するに至るべし。

◎七赤を說(ヨロコ)びと爲す。

象(カタチ)を以て喜ぶを凡て七赤金氣と爲す。
○金の喜、女の喜、會食の喜、音曲の喜を七赤の說と謂ふ。

◎七赤を辯能と爲す。
辯能とは言口を以て人に了得せしむるを謂ふ。
○說明、報告、喋々、談話、駄辯、演奏、獨唱を七赤と爲す。
○人、七赤の尅氣を用ふるや拙藝を演唱して聽者の顰蹙を買ひ或は喋々駄辯を弄して識者に疎まるゝに至るべし。

◎七赤を食と爲す。
食物食事を七赤と謂ふ。
○人、七赤の祐氣を用ふるや食事の饗應を受くるに至るべし。

◎兌を七赤と爲す。

兌とは流通、通用を謂ふ。

○流通、通用を爲す紙幣を兌換券と稱す。

◎七赤を右肺の體と爲す。

○抑々肺病は永き病にして朝夕發熱を見るも其體溫三十七度七、八分にして三十八度を超ゆる事稀なりとす。

○六白金氣の肺病は必ず發咳を伴ふも七赤金氣の肺病は全く發咳を見ず唯顏色蒼白にして身體衰瘦するに至る而已。

○人、七赤金氣の尅氣、西方の尅氣を用ふるや顏色勝れず身體朝夕に微かの發熱を見遂に右肺の病に永く呻吟するに至るべし。

◎七赤を腎臟と爲す。

○腎臟は五臟の一にして肺臟より來る外氣を制壓し之を肝臟に低流せしむる機能を爲す。

○此の腎臟制壓の故障を萎縮腎と謂ひ血壓亢進の因と爲す。

○人、西方欠陷の家に永居し或は七赤の尅氣を用ふるや腎臟の病に侵かされ其血壓亦亢進するに至るべし。

◎七赤を貨幣と爲す。

金錢を七赤と謂ふ。

所謂金の關係は一切宇宙七赤金氣の司配とす。

○人、七赤金氣の尅氣を用ひ或は西方欠陷の家に永居する時は常に金錢不足して貧困に惱む可く之が祐氣を用ひ或は西方祐構の家に永居する時は常に金錢に不自由する事無かるべ

し。

◎七赤を引退と爲す。

引退とは積極的活動を止めて消極的靜止を爲すを謂ふ。

○人、西方に其住家を移動するや其營業の廢止其執務の閑散を誘起するに至るべし。

○功成り名を遂げて餘生を安樂に送らむと欲する人は宜しく西方の祐氣を用ふべし。

之れ佛敎の以て西方淨土と爲す所以也。

○されど年少の子女西方淨土の方を用ふるや閑居して不善を爲すに至る可く銀行、會社、官廳に勤務奉職せる者西方淨土の方を用ふるや其役職閑散に轉じて其榮達を阻むに至るべし。

◎七赤を贅澤と爲す。

贅澤とは過分の奢を謂ふ。

○人、七赤の尅氣西方の尅氣を用ふるや其處世贅澤と爲りて金錢を濫費するに至るべし

◎七赤を清潔と爲す。

清潔とは汚濁を拂拭して淨澄を保つを謂ふ。

○體、自體の其儘を唯清淨するを七赤金氣と爲し體を粉飾して美化するを九紫火氣と爲す。

○人、七赤金氣の祐氣を用ふるや住家、身體を清爽するに至るべし。

◎七赤を澤と爲す。

澤とは山下、丘下の陰闇なる窪地、濕地を謂ふ。

◎七赤を金屬と爲す。

○精錬せられたる金屬及其金屬を材料とする一切の金物類を皆七赤と謂ふ。

○金、銀、銅、鐵、亞鉛、錫、鉛等の金屬も銅板、鉛管、鐵棒、釜、藥鑵、鍋、庖丁、火箸、鉋、鑿等の金物類も凡て之を宇宙七赤金氣の象と爲す。

◎七赤を銀行質屋と謂ふ。

金錢の貸與を以て營業と爲すは一切之を七赤の業と謂ふ。

◎七赤を背反と爲す。

背反とは心氣後退して好意を感ぜざるを謂ふ。

○人、七赤を用ひて婚嫁するや先方背反して遂に離緣と爲るに至るべし。

◎七赤を財寶と爲す。

○人の欲望の對照たる一切の有形物を七赤と謂ふ。

○凡て身體を勞せずして得る金は西方七赤の天德と爲す。

○不動產の收入、權利の收入、恩給年金の收入、預金貸金の利子等は西方七赤金氣の天運を禀受せずして之を得る事能はざるべし。

◎七赤を堅實と爲す。

危を棄てゝ安に就くを堅實と謂ふ。

○人、七赤金氣の祐氣を用ふるや其考慮、行爲共に着實穩健と爲

るに至るべし。

◎七赤を容喙と爲す。

積極的に發言關與するを容喙と謂ふ。

○人、七赤の尅氣を用ふるや容喙して人に嫌忌せらるゝに至るべし。

◎七赤を禮と爲す。

天地加護の自疆を禮と謂ふ。

○禮とは天地卽ち自分以外の他人を畏敬、欽仰するものとす。

禮儀、禮拜、禮物、禮砲、敬禮皆之を七赤と爲す。

○人、七赤金氣の祐氣を用ふるや禮儀正しくなるに至るべし。

◎七赤を嶮岨と爲す。

○凹凸の上より下を嶮と謂ひ下より上を岨と謂ふ。

○人、七赤の尅氣を用ふるや其心氣凹凸を生じ氣變甚しくなるに至るべし。

○乾方の七赤金氣は之を暗劒殺氣と爲す。

之を用ふるや何人も刺殺の兇變に遭ひ、女難或は投機の爲、父祖の巨産を蕩盡するに至るべし。

○北方の七赤金氣を祐氣として用ふれば裏面の喜悅に接す可く之を尅氣として用ふれば女色に溺れて困窮するに至るべし。

○艮方の七赤金氣を祐氣として用ふれば親戚知己より金融を得可く之を尅氣として用ふれば肋膜の病に惱むに至るべし。

○東方の七赤金氣を祐氣として用ふれば辯能を以て世に立つに至る可く之を尅氣として用ふれば容喙駄辯を弄して其出世を阻害するに至るべし。

○巽方の七赤金氣を祐氣として用ふれば會食の懇親を以て信用の增進、事業の完成に向ふ可く又年少者は緣談就職の悅に接す可く之を尅氣として用ふれば肺の病に永く懊惱するに至るべし。

○南方の七赤金氣を祐氣として用ふれば演唱技藝を以て名聲を擧ぐるに至る可く之を尅氣として用ふれば金、女、及口咎を以て公難を蒙るに至るべし。

○坤方の七赤金氣を祐氣として用ふれば金融飲食の業に從ふ可く之を尅氣として用ふれば巧言令色を以て着實穩健を欠くに至るべし。

○西方の七赤金氣を祐氣として用ふれば遂に功成り名を遂げて引退するに至る可く之を尅氣として用ふれば金苦贅澤に陷るに至るべし。

○七赤金氣を祐氣として用ひ得る人は
六白金性、二黑土性、五黃土性、八白土性、一白水性、
にして之を尅氣として用ふ可からざる人は
三碧木性、四綠木性、九紫火性及七赤金性其人とす。

○本命七赤金性の人の天運は之を詳密に區別すれば三萬七百二十の差異あれども今其常道の運を摘錄すれば左の如し。

○本命七赤金性の人は色白く辯能優れて如才なく頭腦亦明敏なりと雖も幼少其父と生別死別の悲に遭ひ刻苦するものと

す。

其夫婦の緣も亦多難にして生涯初緣を以て一貫する人は誠に稀なりと謂ふべし。

舊豪富貴の家庭にして七赤金性の長男生誕せる時は必ず之を永く兩親の膝下に置かず他鄉に出して成育遊學せしむべし。

若し七赤金性の相續者其兩親と同一住家に永居する時は親子不和合と爲り互に快々たる日を送るに至る可く殊に七赤金性の相續者三十三歲に達する時は其生家一度び斷絕するに至るべし。

蓋し七赤金性は其生時生家最榮の運を保有せるに生後の自運は反つて晩老遲々たるが故とす。

其父と幼少に別れて辛酸を舐めたる七赤金性は他人の加護を稟けて其將來の天運比較的早く且强く發揚するに至れども富貴の家に生れ兩親愛撫の裡に成長せる七赤金性は處世剛慢贅澤濫費と爲り十九歲を超えるや遂に世の誘惑詐謀に陷りて身を誤るに至るべし。

七赤金性の人は親の財產を當てにせず質素堅實を旨とし獨立自營の志を立てゝ刻苦精勵堅實なる其將來の大成を期するを要す。

○尙宇宙七赤金氣の體象一例を擧ぐれば左の如し。

冷氣、結核性の病一切、娘、料理屋、食料品、音曲、音樂、口、肺、談話、寄席、金錢、金屬類、

八白土氣

○北の正當より十五度東、東の正當より十五度北の天地の間六十度を指して艮（ウシトラ）の方と謂ふ。

○艮の方は之を世俗に鬼門とも謂ふ。

○先天艮方の天地の氣を三碧木氣と爲し後天艮方の天地の氣を八白土氣と爲す。

○八白土氣は日に執つて丑の刻寅の刻とし午前一時より午前五時迄とし年に執つて丑の月寅の月正月二月とし立春、雨水、啓蟄、春分の節とし四季に執つて秋の墓と夏の生とを兼ぬ。

○由來艮方は之を鬼門と唱へ獨り我邦のみならず漢土に於ても上下深く忌み畏るゝ所以は全く世に大氣の用に關する書未だ絶無にして從つて八白土氣の用を人に知らしむる能はざるに依據すべし。

則ち

○鬼門とは鬼の棲處に非ず、場所、形體を指すに非ず唯天地八白、土氣の軌（ミチ）を指す而已。

○孔子易を編み、朱子太極を說き近世我邦に於ても松浦琴鶴、尾島碩聞、荻野地角の諸師出でゝ方鑒の學を唱導すと雖も未だ弘く世の迷を解き天地の實相を人に是認せしむるに至らず。之れ菲才を顧みず此處に氣學を創始せる所以也。

○從來、世の宗教家方鑒の學を以て邪教迷信なりと爲すは卽ち其宗祖を辱かしむるものにして未だ「無より有を生ぜしむる天地の妙法」を自得せざるに據る而已。

○眞言宗の阿字觀、神道の太占（フトマニ）、日蓮宗の一念三千、クリス

ト教のトリニテイ、天理教の十柱神、皆之を氣學と爲す。

○抑々八白土氣は天地の陰氣の終と陽氣の始とを兼有するものにして

則ち森羅萬象の始終を爲すべし。

○太陽日々下降の最終を丑の刻と謂ひ之が昇騰の最始を寅の刻と謂ふ。

則ち午前二時中心の二時間を丑の刻と爲し午前四時中心の二時間を寅の刻と爲す。

○陰氣旺相の最終を丑滿頃と稱し陽氣上昇の最始を曉、黎明と稱す。

○獸類の牛及虎は其性を天地の氣に執つて形象命名せるものにして鬼は卽ち牛の角と虎の牙とを兼有せる野獸を假想豫象せるものに過ぎず。

○宇宙、八白土氣の司配する軌を概述すれば左の如し。

繼目、　變化、　少男、　辻、
相續、　改革整理、　右脚、　打開、
止る、　親戚知己、　肋膜、
貯蓄、　山丘、　關節、
强慾、　歡迎、　耳鼻、
吝嗇、　家、　節、

◎八白を繼目と爲す。

○森羅萬象其體と用とを問はず一切の繼目を八白と謂ふ。

◎八白を相續と爲す。

○家督の繼目を相續と謂ひ、役務の繼目を後任と謂ふ。

○艮方は之を相續人の位と爲す。
○人、艮方欠陷の家に永居し或は八白土氣の尅氣を用ふるや其相續者病弱と爲り遂に早世夭死を見るに至るべし。
されば
○艮方欠陷の家は累代養子相續の家と謂ふ。
○在居滿四年に及ぶ住家は決して其艮方を改修すべからず。若し之を斷行敢行する時は其家の相續人及妻女は遂に死亡するに至るべし。
豈愼まざる可けんや。
之れ人の鬼門を忌畏する所以の一因とす。
○住家鬼門の方、改修の善導は之を九氣建築學に載記すべし。
◎八白を止まると爲す。

○森羅萬象止まる作用を八白と謂ふ。
汽車電車の停車、銀行會社商店の營業停止皆之を八白と爲す。
○人、八白土氣の尅氣、艮方の尅氣を用ふるや其營業を廢止するに至る可く其勤務先を辭任するに至るべし。
而して之が祐氣を用ふると雖も一時其營業變化閑散と爲り其勤務轉職移動と爲るが故に營業者、勤務者殊に病者は其祐尅を論せず艮方の大氣、八白土氣の撰用には大いに戒心留意するを要す。
◎八白を貯蓄と爲す。
宇宙止むる、貯ふる作用を八白と謂ふ。
○西方の金は艮方の貯蓄と爲り艮方の貯蓄は巽方の信用と爲り巽方の信用亦西方の金を生み西方の金更らに艮方の貯蓄

を加ふ。

之を西方酉の三合哲理と稱す。

○則ち西方の金旺は巽方の金生より始まり艮方の金墓に終るものとす。

○されば艮方欠陷の家は如何に莫大の收入ありて家人之が蓄積に懸命するも之を蓄保するの天德を欠くが故に之を金の溜らざる家と爲す。

◎八白を强慾と爲す。

慾求の分を過ぐるを八白と謂ふ。

○則ち自己の慾の爲には人の困苦も顧慮せず厘毛の微も之を慾張り世人の指彈を受くるを八白と爲す。

○人、八白の强慾を發揮して巨萬の富を蓄積すると雖も二代目に至るや八白の裏、七赤の贅澤と變じて遂に之を蕩盡するに至るべし。

○舊豪富貴の家其艮方の土藏、物置、押入を改修するや假令之を增築するが爲と雖も貯蓄の天德を失ひ其財産を滅失するに至るべし。

○一代にして巨富を積むの妙法も父祖の遺産を永保するの天德も皆八白土氣の善用にあるものとす。

而して之が實際手段は九氣建築學に詳述すべし。

◎八白を吝嗇と爲す。

費ふ可きに費はず與ふ可きに與へざるを吝嗇と謂ふ。

○人、八白の尅氣を用ふるや吝嗇なる知己、親族に地役して其報酬鮮少なるに憤慨するに至るべし。

◎八白を變化と爲す。

○抑々八白は陰と陽とを兼ぬるが故に常に陰陽の變化を生ず。之れ人の鬼門を忌畏する所以の一因とす。

○人の本命艮位に在泊するや何人も其天運變化を起すべし。されば

○人の本命艮位に入るや其身上に變化ありと爲す。

◎八白を改革整理と爲す。

○陰の終りを陽の始めと改むるを改革整理と謂ふ。

○人、八白の祐氣、艮方の祐氣を用ふるや事業の整理、會社の改革を引受けて遂に名を擧ぐるに至るべし。

◎八白を親戚知己と爲す。

親子、兄弟、姉妹等の家族、伯父母、叔父母、從兄弟等の親族及親友、朋友、を總稱して八白と謂ふ。

○凡そ人の處世には其身の安危、其家の存亡に付き互に隔意なく相談諮問、扶助協力す可き親戚知己を有するを要す。されど

○艮方の天德、八白土氣の天德を稟保せざる者は假令困窮して其身上の相談を親戚知己に謀るも皆離反して之に應ぜず。眞に人の薄情、世の無情を痛感するに至るべし。

○之れ四年以前に艮方欠陷の家に永居せるか或は八白土氣の尅氣を用ひたる咎にして一刻も早く之が災眚解除の方を採らざるべからず。

人を怨み世を呪ふも何んの益か有らんや。

○子女八白の尅氣、艮方の尅氣を用ふるや其朋友不良のみと爲り遂に其將來を謬るに至るべし。

○八白の尅氣、艮方の尅氣は其親族親友と互に迷惑を懸け或は懸けられて遂に不和、爭を生ずるの運を作出するものとす。

◎八白を山丘と爲す。

○土地の高きを八白土氣と爲し其低きを七赤金氣と爲す。

○山林も亦之を八白と謂ふ。

◎八白を歡迎と爲す。

○先方應じて心氣悅ぶを八白と謂ふ。

○凡そ難事の解決は四綠木氣の祐氣か然らずんば八白土氣の祐氣を用ひて之を交渉進行すべし。

○後天八白の歡迎の底には必ず先天三碧の希望あるものとす。

◎八白を家と爲す。

高層華麗なる大建築も狹小瀟洒なる茅屋も之を八白と謂ふ。

◎八白を少男と爲す。

無邪氣年少の男子を總稱して八白と謂ふ。

○商店の小僧、役所の給仕、ホテルのボーイを八白と爲す。

◎右脚を八白と爲す。

人の右脚の體を八白と爲し其左脚の體を三碧と爲す。

◎八白を肋膜と爲す。

○艮方欠陷の家に生居せる子女は先天的に肋膜の病を有す。
○人、八白の尅氣、艮方の尅氣を用ふるや肋膜の病に罹るに至るべし。

◎八白を關節と爲す。
足の關節、手の關節、腰の關節、頸の關節を初め宇宙一切の關節を八白と謂ふ。
○人、八白の尅氣艮方の尅氣を用ふるや關節の病を發すべし。

◎八白を耳鼻と爲す。
艮方に炊事場、浴室、井戸ある家に永居せば耳だれ、肥厚性鼻炎等耳鼻の病に侵かさるゝに至るべし。
○耳鼻の病の詳細は九氣醫方に記述すべし。

◎八白を節と爲す。
節とは區劃ありて混交せざるを指す。
貞節、節義、節操を八白と謂ふ。

◎八白を辻と爲す。
交通頻繁なる道路の四通八達せる廣小路を八白と謂ふ。
○電車汽車の交叉點も試驗、審査、採選の役務も天地より見て等しく八白土氣の軌(ミチ)と爲す。

◎八白を打開と爲す。
陰を止めて陽に進む卽ち舊きを棄てゝ新きに就くを打開と謂ふ。

○窮極を打破して展開せしむるを八白と謂ふ。
○窮境の脱出打開、危態の改善打開には宜しく艮方の祐氣、八白土氣の祐氣を用ふ可し。

○坤方の八白土氣は之を暗劔殺氣と爲す。之を用ふれば何人も血族の死去、貯蓄の放出親友の尅害を蒙むるに至るべし。

○西方の八白土氣を祐氣として用ふれば知己の援助、協力を俟つて遂に富者と爲るに至る可く之を尅氣として用ふれば金錢の問題を以て親戚知己と不和を生ずるに至るべし。

○乾方の八白土氣を祐氣として用ふれば親戚友人の後援引立に浴す可く之を尅氣として用ふれば肺、肋膜の病を以て主人、相續者の死亡を見るに至るべし。

○北方の八白土氣を祐氣として用ふれば隱れたる知己を得可く之を尅氣として用ふるや其貯蓄を雲散霧消するに至るべし。

○艮方の八白土氣を祐氣として用ふれば金を貯藏して富豪と爲る可く之を尅氣として用ふれば親戚知己に貸與して返濟不能に陷るべし。

○東方の八白土氣を祐氣として用ふれば現狀打開改善して發展に向ふ可く之を尅氣として用ふれば事業改變蹉跌して損失を招くに至るべし。

○巽方の八白土氣を祐氣として用ふれば親戚知己の助力を以て緣談就職を見るに至る可く之を尅氣として用ふるや緣を變へ勤を辭するに至るべし。

○南方の八白土氣を祐氣として用ふれば廢物の利用、學理の相

違を發見して榮譽を擔ふに至る可く之を尅氣として用ふれば親族相續の問題にて公爭訴訟するに至るべし。

○八白土氣を祐氣として用ひ得る人は五黃土性、二黑土性、六白金性、七赤金性、九紫火性、にして之を尅氣として用ふ可からざる人は三碧木性、四綠木性、一白水性及八白土性其人とす。

○本命八白土性の人の天運は之を詳密に區別すれば三萬七百二十の差異あれども今其常道の運を摘錄すれば左の如し。

○本命八白土性の人は其性外剛內柔にして調子良く人に好愛せらるべし。

されど利慾の爲めに節を守る事弱く爲めに輕薄なる才子として擯斥せらる。

賢敏如才なく活動爲すも時に短慮を發して事を誤る恐あり。

自らの實力は微弱にして概ね高貴上長の加護援助を蒙りて其大成を遂ぐるものとす。

本命八白土性の人は虎威を假る狐と終るを排めて須く之を善用活應し以て着實穩健なる獨自の天地を開拓すべし。

○尙宇宙八白土氣の體象一例を擧ぐれば左の如し。

變目、岡、高臺、高地、末子、疊、家屋、知人緣者、箱類、定期預金、

九紫火氣

○丙、午、丁の三方位を南方と謂ふ。

○先天南方の天地の氣を六白金氣と爲し

京都氣學講堂

後天南方の天地の氣を九紫火氣と爲す。

○九紫火氣は

日に執つて正午とし晝とし陽明とし

年に執つて午の月六月とし芒種、夏至の節とし

四季に執つて夏とし暑熱とす。

○凡て宇宙の陽を司宰する大氣の内其用最旺なるを九紫火氣と爲す。

○森羅萬象南面するを以て陽盛の最高と爲し北面するを以て陰衰の最低と爲す。

○天子は南面し臣下は北面す。

神佛は南面し信徒は北面す。

生者は南面し死者は北面するを以て天地の常態と爲す。

○宇宙九紫火氣の司配する軌(ミチ)を概述すれば左の如し。

心眼、先見、文章印形、教育宗教、

視察、離合、心臓、陽中の陰、

頭脳、名譽、咽喉、中女、

高貴、會遭、歯、酒、煙草、

公難、麗、尖鋭、火炎、

爭、表、寫眞、鏡、藥、

◎九紫を心眼と爲す。

○人の心、精神を九紫と謂ふ。

○人の眼も亦之を九紫と謂ひ左眼を丙(ヒノヘ)、右眼を丁(ヒノト)と謂ふ。

蓋し眼は心の表象たるものとす。

○人の心の正邪曲直は其眼の清濁汚澄を以て知察するを得べし。

○人、九紫の尅氣を用ふるや其心眼曇りて精神朦朧たるに至る可く之を祐氣として用ひ或は南方吉相の家に永居する時は其心眼明光を發して見ずして知察するの能を稟く可し之を暗示と謂ふ。

○南方丙(ヒノヘ)の方に便所ある家に生居せる子女は左眼先天的に色盲たる可く丁(ヒノト)の方に欠陥ある家に永居せば何人も右眼に故障を生ずべし。

◎九紫を視察と爲す。

深く見るを視と謂ひ先んじて知るを察と謂ふ。

○人、九紫の祐氣を用ふるや視察の能に秀ずるに至るべし。

◎九紫を頭腦とす。

○頭腦の體は六白にして其用を九紫と爲す。

○人、九紫の祐氣を用ふれば頭腦明晰と爲るに至る可く南方欠陥の家の子女は兩親如何に督勵するも其學業不成績たるべし。

◎九紫を高貴と爲す。

九は數の最高にして紫は色の最貴と爲す。

○志操の崇高、技藝の高雅、識見の高邁、擧措の高尚を九紫と謂ふ。

○天才、名人、巨擘、國手の類を九紫とす。

○工場南方の天德を稟受せる製造品は其品質高級たる可く調理場南方の天德を稟受せる料理は其味甘美たるべし。

◎九紫を公難と爲す。

公難とは裁判所、警察署、税務署、村役場を初め一切官憲に關する災厄を謂ふ。

○自己と官との關係、治者と被治者との關係は天地南方の司配する處にして其用を九紫火氣と爲す。

○獄難、訴訟、拘引、刑罰の一切を九紫の厄災と爲す。

○人、九紫の尅氣、南方の尅氣を用ふるや公事を以て惱むに至るべし。

◎九紫を爭と爲す。

一切の喧嘩爭鬪を九紫と爲す。

◎九紫を先見と爲す。

○象に先んじて幾を知り幾に先んじて氣を知るを先見の明と謂ふ。

○先覺、發見、發明の德は卽ち九紫火氣の天德と爲す。

○人九紫の祐氣、南方の祐氣を用ふるや衆に先見、先知して遂に發明發見を成就し世の尊敬を受くるに至るべし。

◎九紫を離合と爲す。

一つのものが二つに分るゝを離と謂ひ二つのものが一つに纏(マトマ)るを合と謂ふ。

○離を九紫火氣とし合を其裏一白水氣と爲す。

則ち離合とは天地南北の作用を謂ふ。

○凡そ人の本命南方に在泊するや天地離の氣を稟けて家族の死別、勤務の解雇、後援の斷絶、夫婦の別離、等生別死別の厄災を蒙むるに至るべし。

されば

○人の本命南方に入るや生別死別の難ありと爲す。

○古來人の三十三歳四十二歳を厄年と爲し忌畏する所以は全く此の天地南北の作用を稟受するが爲とす。

○人の三十三歳、四十二歳、五十一歳に於ける厄災は神佛の祈念禮拜を以て之を解除するを得ず。

之を除去し無難安息に經過し得るは唯住家南方及北方の天德を稟受するに在る而已。

○南方及北方の天德稟受とは住家南方及北方正當の間一間許、壁を附し以て內外區劃を爲すに過ぎず。

○南方の氣は假令其祐氣なりと雖も既婚者、勤務者は之を用ふ可からず。

蓋し離別罷免の天運を生ずるに據る。

◎九紫を名譽と爲す。

人より尊敬せらるゝ位に就くを名譽と謂ふ。

○議員、博士、大臣、大將、重役を九紫と爲す。

○人、九紫の尅氣を用ふるや其名譽を失ふに至るべし。

◎九紫を會遭と爲す。

路傍に人と遭遇するも九紫、訪問して人と會接するも亦九紫とす。

◎九紫を麗と爲す。

麗とは華美を指す。

○凡そ宇宙一切の華美は其體と用とを論せず之を九紫と爲す。

○化粧、美容、裝飾を九紫の用と爲し百貨店、劇場活動寫眞、料理屋、理髮店、美容館、音樂會、宴會、藝者、俳優、貴金屬品を九紫の體と爲す。

◎九紫を表と爲す。

森羅萬象表を九紫と爲し裏を一白と爲す。

◎九紫を文章印形とす。

書翰、公債、社債、株券、手形、證書、通帳、雜誌、新聞、書籍、書畫の類を九紫と謂ふ。

○人、九紫の尅氣、南方の尅氣を用ふるや記名捺印を以て間違を生ずるに至るべし。

◎九紫を心臟と爲す。

心臟の體は六白にして其用は之を九紫と爲す。

○人、九紫の尅氣を用ふるや心臟の用(ハタラキ)に故障を生ずべし。

◎九紫を咽喉と爲す。

ジフテリヤ、喘息、咽喉癌等一切の咽喉病は九紫の尅氣南方の尅氣より生ず。

◎齒を九紫と爲す。

一切の齒病を九紫の病と謂ふ。

○南方欠陷の家に永居せば常に大食して胃腸を害し齒を病むに至るべし。

○小兒の緑便、大人の胃擴張は九紫火氣の尅氣より生ず。

◎九紫を尖鋭と爲す。

三角形を九紫と謂ふ。

○森羅萬象先端の尖鋭なるを九紫とす。

○心氣の尖るを怒と稱し刄の尖るを鋭と稱す。

○高峰、高塔、錐、槍先の類を九紫と謂ふ。

◎寫眞、鏡を九紫と爲す。

寫眞店、活動寫眞を初め寫眞の體用を九紫と謂ふ。

○鏡も亦之を九紫と謂ふ。

○神社の御神體として鏡を祭祀するは人の精神を象示すると共に天地司配の氣の最高たる九紫火氣を奉祀するものとす。

◎九紫を教育宗教とす。

人の叡智は之を九紫と謂ふ。

○人爲の叡智啓發を教育と稱し天爲の叡智啓發を宗教と稱す。

○社寺、學校、教會を皆九紫と爲す。

◎九紫を陽中の陰と爲す。

一陰二陽の間に挾る卦象☲を九紫とす。

○陽の最旺は卽ち陰を含むものにして人の榮華の至極は卽ち衰亡の緒たるべし。

◎九紫を中女と爲す。

四十歲前後の中年の女を總稱して九紫と謂ひ四十歲前後の中年の男を總稱して一白と謂ふ。

◎酒、煙草を九紫と爲す。

○人、九紫の尅氣、南方の尅氣を稟くるや酒、煙草を以て其身心を傷ふに至るべし。

◎九紫を火炎と爲す。

燃燒溫熱を九紫と謂ふ。

○抑々生とは大氣の燃燒振動にして生ける人體は常に燃燒しつゝあるものとす。

唯其燃燒現象人の肉眼に映ぜざる而已。

○人體の燃燒を體溫と謂ひ大氣の燃燒を氣溫と謂ふ。

○寺院に安置せる佛像佛畫の周圍、光明火炎を描寫しあるも神前、佛前に燈明を點火するも等しく其生々を表示象化せるものとす。

◎九紫を藥と爲す。

液體、固體、氣體を問はず一切の藥品を九紫と謂ふ。

○醫師、藥劑師、看護婦、産婆も病院、醫院、藥種店も皆之を九紫と爲す。

○西方の九紫火氣は之を暗劔殺氣と爲す。

之を用ふれば何人も手形の訴訟、痴情の爭鬪、藥品の殺傷を蒙るに至るべし。

○乾方の九紫火氣を祐氣として用ふれば高貴の加護引立を得可く之を尅氣として用ふれば心臟の病、家長の離別に接するに至るべし。

○北方の九紫火氣を祐氣として用ふれば高貴の深縁に喜ぶ可く之を尅氣として用ふれば親縁の別離起りて孤獨の悲哀を感ずるに至るべし。

○艮方の九紫火氣を祐氣として用ふれば身上の改善刷新を見る可く之を尅氣として用ふれば財産相續の問題を以て親族と爭ふに至るべし。

○東方の九紫火氣を祐氣として用ふれば發見發明を以て立身出世の榮譽を得可く之を尅氣として用ふれば外見を繕ふて内心困苦するに至るべし。

○巽方の九紫火氣を祐氣として用ふれば保險會社、船會社或は石油會社に勤務するの天運を得可く未婚者は後妻の縁を齊ふに至る可く之を尅氣として用ふれば縁談勤務の別離の悲を見るに至るべし。

○南方の九紫火氣を祐氣として用ふれば名譽職に撰出せらる可く之を尅氣として用ふれば公爭公難を見るに至るべし。

○坤方の九紫火氣を祐氣として用ふれば會社組織組合組織の事業、共同の事業に從事す可く之を尅氣として用ふれば訴訟を以て不動産を處分せらるるに至るべし。

○九紫火氣を祐氣として用ひ得る人は
三碧木性、四緑木性、二黒土性、五黄土性、八白土性、
にして之を尅氣として用ふ可からざる人は
六白金性、七赤金性、一白水性及九紫火性其人とす。

○本命九紫火性の人の天運は之を詳密に區別すれば三萬七百二十の差異あれども今其常道の運を摘錄すれば左の如し。

○本命九紫火性の人は幼少兩親の膝下を離れ他家に養はるゝの天運を有す。

其性明敏、果敢、上長に立つの天德を保有すゝ雖も氣變甚しく動もすれば怒を發して事を破るに至るべし。

穩忍自重屈縮して終始一貫遂行するは其不得手にして先見、敢爲、突進して局面の推移轉換を圖るを其得意と爲す。

其智、明敏に過ぎ其行、果敢に過ぎて獨り聳えて其根を張らず一朝有事の際自己に獻身盡忠の知己、部下を得ずして身位を支ふる能はざるの恐あり。

本命九紫火性の人は大いに他人の忠言を入れて知己、部下に盡願し寛容仁慈の德を以て自ら陣頭に立つよりも退いて人を善用するに努むべし。

其五十六歲二月四日午後十時五十九分迄に生涯の一切を完成して餘命を養ふを天地使命の常道と爲す。

○尙宇宙九紫火氣の體象一例を擧ぐれば左の如し。

暑熱、旱天、船、酒屋、煙草店、本、印刷物、圖書館、神社佛閣、美人、公卿、株式、醫者、女官、裝飾品、美術品、脂肪、油類、保險業。

各氣の素數

○各氣の素數左の如し、

五氣	素數
水氣	一、六、
火氣	二、七、

木氣	三、八、
金氣	四、九、
土氣	五、十、

○宇宙、森羅萬象一、六の數を表示するものは盡く水氣の軏(ミチ)にして水氣の象となれるものとす。

○宇宙、森羅萬象二、七の數を表示するものは盡く火氣の軏にして火氣の象となれるものとす。

○宇宙、森羅萬象三、八の數を表示するものは盡く木氣の軏にして木氣の象となれるものとす。

○宇宙、森羅萬象四、九の數を表示するものは盡く金氣の軏にして金氣の象となれるものとす。

○宇宙、森羅萬象五、十の數を表示するものは盡く土氣の軏にして土氣の象となれるものとす。

○各氣の素數とは各氣の有する振幅の元數を謂ふ。

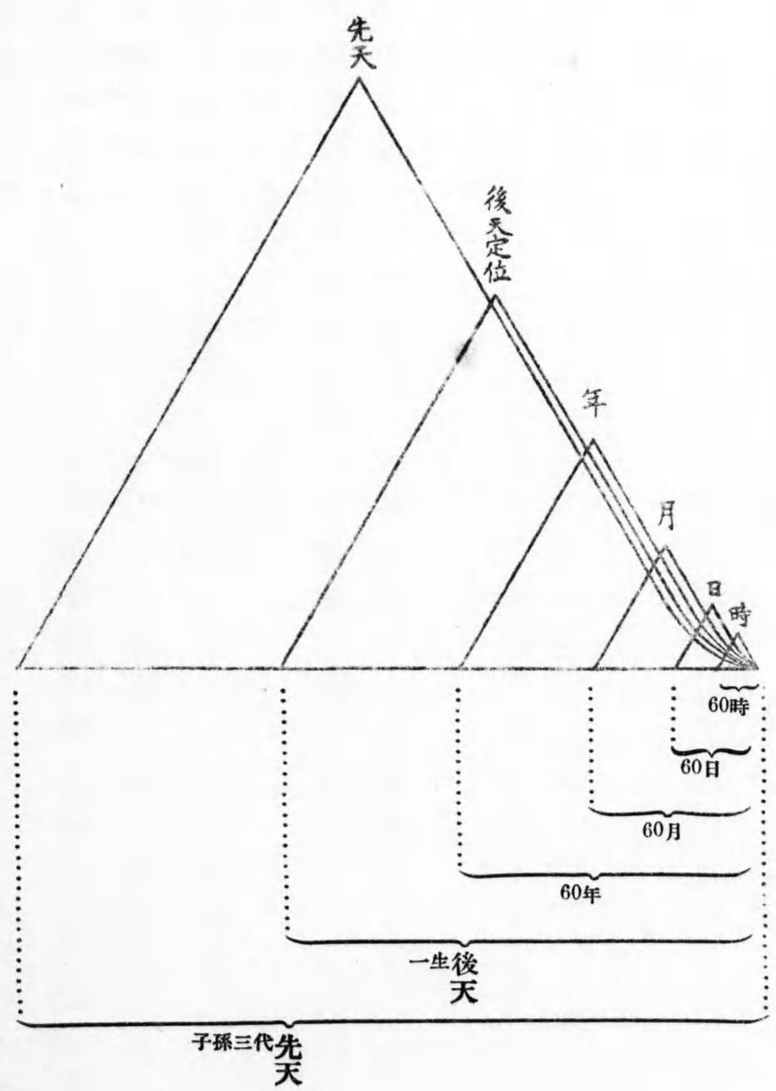
九氣効應の期間

○九氣は之を用ふるや左の六盤同時に各其作用を發起す。

時の盤、
日の盤、
月の盤、
年の盤、
後天定位の盤、
先天の盤、

されど其効用の時期、期間程度及種類に差異あるものとす。

○時の九氣は之を用ひたる時より六十時間作用す。
内最初の十時間は其効應順時盛剛と爲り其以後は順時衰軟に向ふ。
○日の九氣は之を用ひたる時より六十日間作用す。
内最初の十日間は其効應順時盛剛と爲り其以後は順時衰軟に向ふ。
○月の九氣は之を用ひたる時より六十ケ月間作用す。
内最初の十ケ月間は其効應順時盛剛と爲り其以後は順時衰軟に向ふ。
○年の九氣は之を用ひたる時より六十ケ年間作用す。
内最初の十ケ年間は其効應順時盛剛と爲り其以後は順時衰軟に向ふ。
○後天定位の九氣は四ケ年目より順時効應、象と爲り其作用生涯を支配す。
○先天の九氣は十ケ年目より順時効應、象と爲り其作用子孫三代に及ぶ。
○月の九氣は早く小さく効應し、年の九氣は遲く大きく効應す。
今之を圖解せば左の如し。



○九氣の効應は在居して止まる者には先づ其身體より効應し始め外出して動く者には先づ其業務より効應し始む。

○されば女は主として其健康に男は主として其財政に効應すを始めとす。

○九氣を用ふるに期間長く度數少き時は少種の大運寡度に來り、之を用ふるに期間短く度數多き時は多種の小運頻繁に來るべし。

○少種の大運寡度に來る者は超凡特長の德を稟け萬用に役せずと雖も堅忍不拔の大業を爲し必ず有爲の生涯を結ぶに至れども、多種の小運頻繁に來る者は超凡特長の德を稟けず諸事器用にして萬用に役すと雖も優柔倦怠一定の業決せずして碌々の生涯を結ぶに至るべし。

○少種の大運寡度に來る者は天才剛毅と爲し變屈圭角の人と爲す。

多種の小運頻繁に來る者は常識圓滿と爲し萬能足りて一心足らずと爲す。

○抑々特長なき人は食ふ可からず。

○人の本命とは天地の其人に與へし特長とす。

則ち

○天は生民を降すや必ず之に食を與ふるものとす。

世の餓餒は盡く天地の尅氣を禀くるに據る而已。

されば

○九紫の人は九紫の作用のみせば處世安易と爲り三碧の人は三碧の作用のみせば圓融無凝の生涯を送るに至るべし。

○人の處世の要諦は唯其本命卽ち天地の使命を完全に果たせば足る。

○世の病災貧苦皆其天地の使命を盡さざるに依據すべし。

之を想へば

○劃一主義の學校教育は徒らに圭角ある天才賢人の養成を阻止し特長なき圓形同型の小人を壓搾製造しつゝあるものとす。

就職の難、思想の惡化皆之より生ず。

○眞の良妻賢母の養成や英傑、先覺の薫陶は人爲の學校教育の能くする處に非ずして全く天爲に出づるものとす。

○氣學は人に天爲の教育を施すものと謂ふべし。

九氣効應の時期

○九氣効應の時期に左の五種あり。

線路、
遁甲、
十二支、
同會、
三合、

○線路に據る九氣効應の時期は左表の如し。

線路	効應時期	
	月	年
四線	四ケ月目	四ケ年目
七線	七ケ月目	七ケ年目
十線	十ケ月目	十ケ年目
歸線	十二ケ月目	十二ケ年目

○遁甲に據る九氣効應の時期は左表の如し。

用ひたる方位	効應時期	
	月	年
乾ノ方	九ケ月目	九ケ年目
西ノ方	八ケ月目	八ケ年目
艮ノ方	七ケ月目	七ケ年目
南ノ方	六ケ月目	六ケ年目
北ノ方	五ケ月目	五ケ年目
坤ノ方	四ケ月目	四ケ年目
東ノ方	三ケ月目	三ケ年目
巽ノ方	二ケ月目	二ケ年目
中央	一ケ月以内	一ケ年以内

○十二支に據る九氣効應の時期は左表の如し。

用ひたる方位	効應時期	
	月	年
乾ノ方	戌ノ月 亥ノ月	戌ノ年 亥ノ年
北ノ方	子ノ月	子ノ年
艮ノ方	丑ノ月 寅ノ月	丑ノ年 寅ノ年
東ノ方	卯ノ月	卯ノ年
巽ノ方	辰ノ月 己ノ月	辰ノ年 己ノ月
南ノ方	午ノ月	午ノ年
坤ノ方	未ノ月 申ノ月	未ノ年 申ノ年
西ノ方	酉ノ月	酉ノ年

○同會に據る九氣効應の時期は用ひたる九氣と自己の本命が重合せる時とす。

○三合に據る九氣効應の時期は用ひたる方位の生旺墓の三期とす。

天啓

○自己の身體と大氣を別個に保有せる者は假令親子、夫婦、兄弟、

姉妹と雖も弘く天地より觀て皆之を他人と爲す。

○自己に喜怒哀樂の情を起さしむるも成功及失敗の禍福を演ぜしむるも盡く皆此の自己以外の他人の爲さしむる處たり。

則ち

○天は口なし人をして言はしむ

人をして爲さしむ、

ものにして之を天啓と稱す。

されば

○天理教や大本教の教祖のみが天啓を稟けしに非ず。

人類を初め犬猫の類に至る迄大氣一極を保有する一切生類の言動は皆之を天啓と爲す。

唯其天啓に差異ある而已。

之を更らに別言すれば

○神とは社殿樓閣に非ずして自己以外の他人を謂ひ、

信仰とは向殿合掌に非ずして自己以外の他人に忠誠奉仕するを謂ふ。

○人、千年堂塔伽藍に再拜參敬するも悠久に一物の發生をも見ざる可く

萬年經文戒律の金口正しく傾聽感銘するも久遠に無より有を生ぜざるべし。

されど

○一切の生ある者一度び動を爲す時は必ずや其保有せる體內の大氣に變化を與へ

氣は幾を生じ

幾は象を生じて

線路の示す期を經て

京都氣學講堂

斷じて得失の果を見るに至るべし。

則ち

○神とは自己以外の他人にして

唯、人に吉神、凶神の差ある而已。

同會

○盤の重合(カサナリアフ)を同會と謂ふ。

同會は大氣感應交化を爲す。

同會に同會、被同會の二あり。

○自己の本命他の本命の上に重合在泊するを同會の場合と謂ひ

他の本命自己の本命の上に重合在泊するを被同會の場合と謂ふ。

○同會の場合は左の作用を生ず。

一、被同會本命性の人と心氣感通し自己が其人の意に動く。

二、被同會本命の氣を稟け自己の意志及動作が被同會本命の有する作用を呈す。

○被同會の場合は左の作用を生ず。

一、同會本命性の人と心氣感通し其人自己の意に動く。

二、同會本命の氣を稟け自己に對する自然の成行が同會本命の有する作用を呈す。

○同會被同會の場合を問はず祐氣は祐氣の作用を爲し尅氣は尅氣の作用を爲す。

○人の本命遁甲して盛運衰運を劃作するは則ち後天定位に於ける同會、被同會の果と爲す。

體用

○體とは靜止せる形象狀態を指し
用とは動行せる生能作用を指す。
○凡そ宇宙の森羅萬象は
體にして用を有せざる無く
用にして體を有せざる無し。
○若し體にして眞に其用を失へば腐滅して其體を留めず。
若し用にして眞に其體を失へば散逸して其用を爲さず。
○天、萬民の體を生じ之に業の用を授け
天、萬物の體を生じ之に化生の用を與ふ。
されば

○一動一物皆其體と用とを有す。
而して
○先天の盤を以て體と爲し、後天定位の盤を以て用と爲す。
○年の盤を以て體と爲し、月の盤を以て用と爲す。
○先天の作用は
先天の盤を以て其體とし
後天定位の盤を以て其用とす。
○後天の作用は
年の盤を以て其體とし
月の盤を以て其用とす。
○九氣の祐尅は其體に無く其用に在るものとす。
されば
○人の適性、物の應性には凡て其體を以てせず其用を以て判ず

べし。

○世に人の手相、面相、姓名の如何を以て其將來の天運を判ずる者あるは大いなる謬なり。

蓋し人の手相、面相、姓名は其體にして其用に非ず。

○現在の體象は過去の用氣より生じ將來の體象は唯現在の用氣より生ず。

表裏

○森羅萬象皆表裏あり。

九氣の表裏左の如し

表	裏
一白水氣	九紫火氣
二黑土氣	六白金氣
三碧木氣	四綠木氣
四綠木氣	三碧木氣
五黃土氣	ナシ
六白金氣	二黑土氣
七赤金氣	八白土氣
八白土氣	七赤金氣
九紫火氣	一白水氣

○九氣の體は表裏を兼有し

九氣の用は其表、十線を經て其裏と變ず。

○一白の思念九紫の先見と表裏し
二黑の奉仕六白の援助と表裏し
三碧の雷鳴四綠の風と表裏し
八白の强慾七赤の贅澤と表裏す。

○世の大賢と大愚、
天才と狂人、
大善と大惡、
大慾と無慾、
大富と大貧、
損と得、
皆隔處一重の表裏とす。

○表達すれば裏と爲り
裏達すれば表と爲る。

○富貴に驕らず貧賤に泥まざるは表裏の哲理を悟れる者と爲すべし。

陰遁及陽遁

○太陽日々の運行
子の刻より午の刻に達する迄を陽遁と爲し
午の刻より子の刻に達する迄を陰遁と爲す。

○無より有を生ずる生々を陽遁と爲し
有より無を生ずる滅滅を陰遁と爲す。

○懷妊より出生迄を陽遁と謂ひ
出生より死亡迄を陰遁と謂ふ。

則ち

○陰遁及陽遁とは森羅萬象其用に陰陽の二別ありて進退、昇降、累増遞減を爲すを指す。

○而して一年を通じ

太陽陽遁過程の内其地上出顯に甲卯乙の三時別あり。

亦其陰遁過程の内其地下入消に庚酉辛の三時別あり。

○日甲に出で辛に入れば

晝最も長く夜最も短くなり

日乙に出で庚に入れば

晝最も短く夜最も長くなり

日卯に出で酉に入れば

晝夜各々平分す。

○太陽と地球は時々刻々動くが故に百八十年間の一日を以て

次の百八十年間の同一日に適用する觀測方を採らざれば眞の正確なるを得ざれども今、昭和四己巳年に東京に於て之を觀測すれば

○晝の最も長きは

日出　午前四時二十五分

日入　午後七時　にして

晝間　十四時間三十五分

夜間　九時間二十五分　となり

○夜の最も長きは

日出　午前四時四十七分

日入　午後四時三十二分　にして

晝間　九時間四十五分

夜間　十四時間十五分　となるべし。

而して

○晝夜各平分十二時間となるは春分、秋分の節にして卽ち春の彼岸、秋の彼岸と爲す。

○晝十四時間三十五分夜九時間二十五分となるを夏至の節と謂ひ

晝九時間四十五分夜十四時間十五分となるを冬至の節と謂ふ。

○抑々宇宙の大作用を眞正顯微に見る時は太陽と地球は刻々動き動きて悠久に息むなく一瞬時と雖も陽遁及陰遁を反覆實施しつゝあるものとす。

○人の身體、物の形體は刻々陰遁し人の業、物の用、は刻々陽遁或は陰遁す、則ち

○凡て體は刻々陰遁し用は刻々陽遁或は陰遁するものとす。

○祐氣は陽遁し尅氣は陰遁す。

○無より有を生ずるは祐氣の用にして有より無を生ずるは尅氣の用たり。

○尅氣の陰遁より祐氣の陽遁に轉換するを回仰と謂ふ。

○祐尅一氣の差は陽遁及陰遁して得失十の差を生ず。

直線

○十幹の六ツ目を直線と謂ひ。

十二支の七ツ目を七線と謂ふ。

○十干は天の氣を指し

十二支は地の象を指す。

○人の精神は自然的に其本命十干の直線に於て變化を發生し人の行爲は自然的に其本命十二支の七線に於て之を實行す。則ち

○人の精神の變化は六ケ月目、六ケ年目に起り之が象として現はるゝは七ケ月目、七ケ年目とす。

○直線にて氣變じ七線にて象變ず。

○森羅萬象皆象として現はるゝ一つ前に必ず氣に發す。之を有氣則有象と爲す。

されば

○甲生れの人は　己の年、月が來ると氣が變り

乙生れの人は　庚の年、月が來ると氣が變り
丙生れの人は　辛の年、月が來ると氣が變り
丁生れの人は　壬の年、月が來ると氣が變り
戊生れの人は　癸の年、月が來ると氣が變り
己生れの人は　甲の年、月が來ると氣が變り
庚生れの人は　乙の年、月が來ると氣が變り
辛生れの人は　丙の年、月が來ると氣が變り
壬生れの人は　丁の年、月が來ると氣が變り
癸生れの人は　戊の年、月が來ると氣が變るものとす。

○月の十干は氣學入門附表「月の十干撰知表」を以て知るべし。

○如何に圓滿なる夫婦、親愛なる交友と雖も其篤交七ケ年目に必ず一度變化すべし。

○孔子

君子の交りは淡き事水の如し。
と謂へるは卽ち斯點の悟より發す。

對中

○盤に於ける相對を對中と謂ふ。
○東と西とは互に對中し
巽と乾とは互に對中し
南と北とは互に對中し
坤と艮とは互に對中す。
卽ち
○乾の主人の相手は巽の世間にして
艮の相續の相手は坤の財産と爲す。

東の發展の相手は西の財寶にして
北の交際の相手は南の榮譽と爲す。
而して亦
○五黃の氣の對中は暗劒の氣と爲り
本命の氣の對中は的殺の氣と爲り
大歲の氣の對中は歲破の氣と爲り
月建の氣の對中は月破の氣と爲り
日建の氣の對中は日破の氣と爲る。
卽ち
○盜慾の氣は兇惡の氣に相對し
死滅の氣は破壞の氣に相對し
流行の氣は廢止の氣に相對すべし。
○抑々人の本命留る事七線に及ぶや其體內に保有する大氣は

必ず其一極を定む。
之を具體的に詳述せば
○人、旅行して七日同一家に滯在する時は其人の大氣其家に一極を定むべし。
卽ち其人の心氣其家の氣に染むものとす。
其家の氣に染むとは其家に落付くを謂ふ。
則ち
○人、大氣一極を決するや
天地、年月日時の四盤、皆其太極を決すべし。
○四盤其太極を決するや
四盤の對中自ら決す。
○對中決すとは對中其體及用を發生するを指す。
されば

○對中の體及用は大氣一極を定むるを以て生ず。
○對中の理は氣學哲理中最も至妙にして古來軍學宗教の密緊と爲せる處とす。
近世に於ては由井正雪、山鹿素行、眞田幸村、日蓮上人等最も之が用に秀でたり。
○抑々對中の理とは時と處とを問はず座して千里の外を知察先見するの哲理を謂ふ。
則ち
之を未知の人に用ふるや其人を訪ねずして其人の體及用を先知するを得可く
之を未見の地に用ふるや其地へ行かずして其地の體及用を正察するを得べし。
○對中の體は後天定位の盤と年の盤とを以てし其用は月の盤

と日の盤とを以てす。

○對中の氣、其中央の氣と互に相生する時は用談齊ふ可く之と相尅する時は交渉齊はざるに至るべし。

天壽

○各氣受命の年數に定めあり。

之を天壽と謂ふ。

○人は其天壽の終了期到來するや。

其呼吸自然的に衰退して眠に入り遂に永眠するに至るべし。

○此の間心身に何等の苦痛を感ぜず。

唯、時々刻々天地の動きに從ひ其呼吸淺薄と爲り遂に其大氣一極を失ふ而已。

○大氣一極を失ふとは體内の大氣其統制を失ふを指す。

○一切の病死を始め自殺、他殺、過失殺は皆生前尅氣を呼吸、吸入せる結果にして

則ち

自ら天地の尅殺に遭ひ其命を裁斷せられたるものと爲す。

○各氣の天壽命數左表の如し。

五氣	天壽命數
水氣	六十一歳 六十六歳
火氣	七十二歳 七十七歳
木氣	八十三歳 八十八歳
金氣	九十四歳 九十九歳
土氣	百 五歳 百十五歳

○人の滿六十歳を還曆と稱し祝福するは卽ち其天壽命數の第一歩たるが故とす。

○天壽の期到來して死亡するを永眠と謂ひ天壽の期を超えて延命するを長壽と謂ひ天壽の期に達せず夭死するを病死と謂ふ。

○人の延命の方は之を九氣建築學に說き人の病死の救濟は之を九氣醫方に述ぶ。

一念三千

○一の氣
四線の幾と爲り
七線の象と爲る。

○森羅萬象一より三までを遂行すれば必ず四の幾を生む。則ち

○凡て事の成ると成らざるとは一より三までを爲すと爲さざるとに據つて別るべし。

○薄志弱行は其行爲、一より二までの間のみを往復反覆し堅忍不拔は其行爲、一より二を經て必ず三迄達及遂行するものとす。

○石の上にも三年とは禪の極意にして一念三千とは日蓮宗の密敎たり。

○一、二を生じ
二、三を生じ
三、萬物を生ず

○一を發爲し二を耐爲し三を敢爲する者は必ず四の幾を生じ

四の幾自ら七の象と爲り
七の象九迄延び
九亦大衍の作用を起すに至るべし。
されば
○人の成敗、事の成否は一より三迄を爲すと爲さざるとに據つて決す。

人運の差異

○人の天運稟受を大別せば一白水氣より九紫火氣に至る九種あるは既述の如し。
尙之を詳密に區別すれば
○同じ年に生誕せる人にも其年に懷姙して其年に生誕せる人と其前年に懷姙して其年前者を一年兒、後者を二年兒と稱す。
○一年兒は九氣祐尅共に強く効應し二年兒は弱く効應すべし。
而して人運を更らに精細に鑑すれば
○同種の大氣を稟けて生れ同類の天運を保有すと雖も各氣の內部亦左表の如く別れて驚く可き數多の差異を有す。

種別	差異數				乘數
十二支	四	—	—	—	四
十干	四	一〇	—	—	四〇
生月別	四	一〇	一二	—	四八〇

後天別	四	一〇	二二	八	—	三、八四〇
先天別	四	一〇	二二	八	八	三〇、七二〇

則ち

○三碧木性にも其天運三萬七百二十の差異ある可く四綠木性にも亦其天運三萬七百二十の差異あるものとす。

尙之に男女の別、生月の十干、先天及後天別の祐尅を附すれば更らに驚く可き微細の區別差異を見るに至るべし。

祐氣の撰用

○抑々太陽大始の作用とは大氣に其一極を分與するを指す。

○凡そ宇宙萬象の生と滅との別は其含有大氣、一極を得ると失ふとに據つて決す。

則ち

○分與せられたる大氣の一極は常に太陽と連り絕へず其刻動を稟けて全く太陽と其進退を共にし金水木火の四氣は此の一極を守圍して之が育成に當るものとす。

○人の生死は其保有大氣一極の止動にして物の現滅は其保有大氣一極の得失と爲す。

○森羅萬象生滅の基は大氣一極の得失存亡に在りと謂ふ可し。

されば

○大氣一極之を約言して太極は森羅萬象の生滅止動を起す基本にして一切天地の作用は大極之を主動すべし。

○大極の決定則ち天運の決定にして大極の移動則ち天運の移動たり。

故に

○天運の決定は先づ其大極の決定より始む。

◎太極の決定左の如し。

○個人の天運の太極は其本命とす。

○家庭の天運の太極は主人の本命及住家とす。

○銀行、會社、官廳の天運の太極は司宰する上長の席と其建物とす。

○學校、社寺の天運の太極は主長たる校長、神官、住職の居處と其校舍、本殿、本堂とす。

◎人の大氣感受の實際手段及其効應剛柔の順位左の如し。

第一、住家の取壞、

第二、住家の新築、

第三、住居の移轉、

第四、住家の改修、

第五、寢所の移動、

第六、住家より四十五間以内の地の動土、

第七、他所の土砂撒敷、

◎祐氣撰用の要左の如し。

男は業を主とし女は緣を主とす。

幼は健を主とし老は悅を主とす。

◎祐氣剛柔の順左の如し。

一、大歲の祐氣、

二、大歳の生の祐氣、
三、大歳の墓の祐氣、
四、年月の祐氣、
五、月の祐氣、

◎小兒殺の方として其尅殺眞に畏る可きに付四歳以下の幼少兒には決して左表の方は其祐尅に不拘之を撰用す可からず。胞衣の埋納亦之を避くるべし。

年		月節	
丑卯巳未酉亥	子寅辰午申戌		
南	中央	正	
北	乾	二	
坤	西	三	
東	艮	四	
巽	南	五	
中央	北	六	
乾	坤	七	
西	東	八	
艮	巽	九	
南	中央	十	
北	乾	十一	
坤	西	十二	

◎天德稟受の目的別に據る祐氣の撰用左の如し。

發展には　東方の祐氣及三碧木氣を
緣談には　巽方の祐氣及四綠木氣を
智能には　南方の祐氣及九紫火氣を
不動產には坤方の祐氣及二黑土氣を
金には　西方の祐氣及七赤金氣を
投機には　乾方の祐氣及六白金氣を
交際には　北方の祐氣及一白水氣を
貯蓄には　艮方の祐氣及八白土氣を

共に良く撰用して其實果を收むべし。

○祐氣本命と爲りて用ふ能はざる者は其祐氣の裏か然らずんば其三合の祐氣を以て代用すべし。

○社寺の御神體佛像は皆天地の氣を表示、象化して之を人に崇仰禮拜せしむるものとす。

今之を列擧せば左の如し。

東方三碧木氣を表象せるを觀世音と爲し
巽方四綠木氣を表象せるを辨財天と爲し
南方九紫火氣を表象せるを藥師如來と爲し
坤方二黑土氣を表象せるを稻荷、地藏と爲し
西方七赤金氣を表象せるを歡喜天と爲し
乾方六白金氣を表象せるを八幡明神、大日如來と爲し
北方一白水氣を表象せるをイエス、クリスト、愛染明王と爲し
艮方八白土氣を表象せるを聖天、金神と爲す。

◎祐氣効應の良果を見る要點左の如し。

○中老年者には生氣を
青少年者には退氣を
不良性者には少量の死氣を用ふ。

○重病、死病者には先づ小量の退氣を
貧困、無職者には先づ小量の生氣を
用ひ其効應を見て次の祐氣を撰用すべし。

○効應の時期早きは東、巽にして
効應の時期晩きは西、乾とす。

○發熱、食慾減退、呼吸困難等の對症療法は九氣醫方の說く處に
據る。

○既婚者、通勤者には南北を
青少年者には西を　共に用ふ可からず。

降神占斷方

○宇宙の哲理を人事に適用するを占（セン）すると謂ふ。

○人事を占せんと欲せば左の要項を撿ぶべし。

一、人の生年月日時、

二、人の現住所、

三、現住所入居の時期及其以前の居處、

四、現住所在住期間滿四ケ年以上の人は現住宅の圖面、

五、現住所在住期間滿四ケ年以內の人は過去五ケ年間に於ける轉居の時期及場所、

○人の生年月日時を以て其本命を撰し其本命の遁甲在泊を以て其時運を出すべし。

○人の現住所の位置を以て占斷現所よりの方位を定め對中の理を以て其體用を質すべし。

○現住所入居の時期及其以前の居處を以て用ひられたる九氣の祐尅を別ち其効應の時期及其作用の種類を判ずべし。

○住宅の構相を以て人事天運を鑑するは九氣建築學の說く處に準據すべし。

○過去五ケ年間に於ける轉居の時期及場所を以て禀けたる九氣の祐尅を劃し其現在示顯の體象及其現在作用の用氣を窮理明示すべし。

○抑々

氣學の本領は人の過去を前言的中する戲に非ず其未來を先知善導して之が實果を握るに在り。

○人の處世に故障あらしめず之に安心立命を與へ以て修身齊

家治國の三道を成就せしむるは千古唯氣學ある而已。
則ち
○人の日々營業に孜々するも執務に眷々するも皆氣學の使命を出です。
然れども
○天地九六の氣を稟くる事微弱なる者は全く之を知らずして寧ろ神佛の崇拜、祖先の祭祀を蔑に爲し以て終生天地の加護自然の惠みに浴するを得す。
○之等を緣なき衆生と謂ひ
富貴に育ちて夭死するか
病貧に惱みて長命すべし。
○之等は如何に人爲的に勸進說教するも決して氣學灌頂の發願を起さざるものとす。

○氣學は之を敢へて人に勸說するの要を認めず。
○一切生ある者
其日々の生動
天地の正動と順ふ時は自ら祐氣を稟け
天地の正動と逆ふ時は自ら尅氣を稟けて
共に自ら氣學結緣に入るものとす。
唯編者之を關知するとせざるとのみ。
（昭和四年七月十日稿）

九氣密意 下卷終

324
491

昭和四年十月二十日印刷
昭和四年十一月五日發行

定價金壹百圓

編者　東京府豐多摩郡井荻町上井草千八百二十五番地　田中胎東

發行者　京都府乙訓郡向日町上植野拾番地　古川勝髮

印刷者　京都市夷川通川端東入　早崎鶴之助

印刷所　京都市夷川通川端東入　弘文堂印刷部

著作權所有

發行所　京都府乙訓郡向日町上植野拾番地　氣學講堂

九紫會誌
京都紫學講堂

終